

日本の外国語教育と日本の存亡

岩 淵 孝

本年度3月末日をもって、専修大学を退職致します。諸先生方の長きにわたるご厚情に感謝申し上げつつ、この拙文を書かせていただきます。

1. 序

英語を教えてきた者として、主として英語教育・学習の問題に触れたい。また、他の外国語も似たような問題を抱えているので、それについても少し触れてみたい。

英語は今や「外国語」ではないし「国際語」でもない。それは昔の話である。専修大学の科目区分は修正する必要があるかもしれない。英語は「世界標準語 (standard language)」（猪口孝前東大教授）もしくは「世界共通語 (common language)」（岩淵）である。

この3年間カンボジア王国 Siem Reap 州に行きボランティアとして英国の NGO が運営する学校で英語を教えてきたが、東南アジアの方がパリやイタリアよりも英語がよく通じる。首都のプノンペンには外国人の姿はあまり見ないのに、だれでもどこでも英語がよく通じて全く不自由を感じなかった。ご承知のように ASEAN の会議は英語で行われている。自戒を込めた言い方をすれば、英語の教師は世界をあまり知らないで「世界共通語」を教えている。この問題はいったいどこから手をつけたらいいのかわからない。若い先生方に期待したい。

日本の語学教育は惨憺たる有様である。「文法・訳読主義」で受験のみをひたすら目的とする英語教育・学習を過去 60 年以上にわたって続けてきてしまった。部分的で一時的な修正は時折はあったが、おおむね旧制中学・旧制高校のままである。「文法・訳読主義」が英語の習得には全く無駄であることは、60 年以上も前に米国英語教育学会が声明を出している。「文法・訳読主義」では、ごく少数の独学能力の高い生徒しか、英文読解能力がつかない。この「文法・訳読主義」を放送大学のテレビで『嵐が丘』（Wuthering Heights）や『ローマの休日』（Roman Holiday）等を使って東大教授が「実用英語」を毎週やっているのを見て、あいた口がふさがらない。彼が話す言葉は 90% が日本語である。文法説明は中学・高校と全く同じ。他方、「Political Economy of Japan」担当の同志社大教授林俊彦先生は、100%きれいな英語で講義をしている。ゲストで招かれる先生方も 100%英語である。教科書、試験もすべて英語。

NHK では他の外国語番組もやっているが、ヨーロッパ語の教授法は英語とほぼ同じく「文法・訳読主義」といえよう。韓国語と中国語は斬新な教授法を採用している。「世界標準語」の次は中韓等近隣諸国の言語習得が本来の順序ではなかろうか。ヨーロッパから学ぶことは、今でもかなり多いことは確かであるが。

2. 日本の英語教育を正当化する理由はみあたらない

日本国内では英語を話せる人は珍しいとか、すごいとか思われがちだが、一歩国外へ出れば英語を話すのはごくごく当たり前で普通のことである。

シンガポール、マレーシアは英国の植民地だったから英語ができて当たり前だという人がいるが、両国は意欲的な英語教育改革を徹底的に行った。それが両国の英語の力をアジアのトップに押し上げ、同時に目覚ましい経済発展の原動力になった。シンガポールの GDP per capita は今や日本よりもはる

か上である。ある統計によれば、日本の英語能力は4年前にカンボジアに追い抜かれ、2年前には北朝鮮にも追い抜かれてしまったので現在はアジアで最下位である。日本経済新聞も平成23年12月の紙面で報じている。

私の外国語習得理論は以前述べたので、ここでは一言だけにしたい。“A Massive, Comprehensible Input and Output Through Mouth”であるが、「大量」について付言すると、カンボジアの英語教科書は日本のとほぼ同じ厚さだが、すべて英語で書かれており、和訳に当たるカンボジア語訳や解説は全く書いてない。しかも紙の量に限界があるので活字が極めて小さい。したがって、内容量は日本の教科書の約50倍である。

しかし、日本の大学生の現状を見ていると「何を教えるか」よりも「自分から学習する意欲を育てる」ことが急務であろう。授業時間は非常に少ないから、自分で積極的に大量学習をしてもらえない。そこから、「何」を「どのように」勉強するかがはじめて出てくる。

このままでは、日本の英語能力はアジア最低から世界最低になってしまうかもしれない。貧富と英語学習能力はほとんど関係ない。私が教えてきたカンボジアの小中高生の家庭(貧しい農漁民)は年収10万円がやっとで食うや食わずの毎日である。ところが、生徒たちの知的好奇心や学習意欲はそんな家庭背景をまったく忘れさせるほど旺盛で、元気でにぎやかである。周りがみんな貧しいから、生徒は貧しさをほとんど意識してない。ハングリー精神ではなく、純粋な好奇心や学習意欲が原動力になっている。教室でも図書室でも、勉強に関係ない無駄話は一切しないし、勉強と関係ない行動も全く見られない。もちろん私語など皆無である。しかも、先生の指導があるわけではない。日本の学生を180度ひっくり返したような感じである。手を挙げる←→挙げない、質問する←→しない、発言する←→しない。カンボジアの生徒と日本の学生を取り換えたいくらいである。

語学教師として絶対不可欠なのは、いま世界はどうなっているかという知識や関心であろう。最近「グローバル化」という語彙がほぼ無批判に使われているが、果てしなくますます膨らむ人間の欲望を満たす仕組み、すなわち、「市場競争経済原理」というパラダイムが中国・インド等までに広がり続けている現在、それに伴い、資源やエネルギーの残存量減少速度が急速に増している今、200 年余にわたって続いてきたこのパラダイムは一体あと何年続くのであろうか。また、これに代わる新たなパラダイムはうまく間に合っ
て生じてくるのであろうか？パラダイムの変換は円滑に行われるのであ
ろうか、それとも人類が経験したことのない規模な惨禍を伴うのであろうか？